

陽気だより

養徳社 検索

No10 2008.1.15

第二号から

『陽気』は、昭和24年5月の創刊、平成21年に60年を迎えます。その足跡の一端を、昔の記事から振り返っていきます。

梅に鶯

中山正善



中山正善・2代真柱
明治38年(1905)ー昭和42年(1967) 63歳。

梅に鶯と云う言葉がある。又、梅にも鶯とも言えよう。

前の言葉の方が普通かも知れない。が「も」一字入ると意味がおそろしく素直でなくなる。

昔から梅と鶯とは持ちつまたれつのように、言われて来た。偶然にその二つが仲よしのなか、鶯が梅の色香に迷って叢からでてくるのか、梅が鶯に誘われて色香を出すのか、又その何れでもあるのか、ないのか、判然とせない。しかし判然とさせる必要もなく、昔から此の二つが春の訪れの前奏曲と思われ、艶と言いうよりも清雅な気持をあたえている。

雪を破つて咲く梅の花には、

人々は何となく忍耐強い雌伏、潜在の気持が、パツと仮面を外して表へ出て来た感じを持つ。耐乏生活の結実として、清らかな萌芽をよるこぶ気持を持つ。長い希望の期を経て、成就の黎明を仰ぐような喜びを懐く、そこに梅の清香を賞で、艶やかでない清々しさを口にするのであろう。東西古今、梅を詠った人々は多く、その詠歌にも富む事であろうが、同じく実を結ぶ前曲としての花でありながら、梅には濃厚な感情を抱かないのは、その如月と言う時季の然らしめる錯覚であるとも言えよう。

あり、無心に本能を行使するに過ぎないのである。鶯が何をたべようと、梅に戯れようと、何等人間に関係ある事ではないに違いない。

然し、人は動物学者や植物学者のように梅や鶯を科学して、その習慣を穿つばかりに興味を覚える人ばかりではない。否むしろ鶯を梅のスポークスマンのように考えたり、梅を鶯の思いもののように思ったり、しかもその関係に爛れた腐れ縁を思わず、清い交わりを想像している人々の方が多くはないか。早乙女心の淡い萌のように、やがて間近い絢爛の春の序曲として、考えている人々の方が多くはないか。初夏の山陰に聞く老鶯の美曲よりも、鶯は如月のものと歳時記にもものつてあつてみれば、鶯の啼鳴は早乙女の初恋心を表象するものと、昔から相場がきまっていたのであろう。

大和の庭に来て啼いた鶯の声である。

例年より暖かであったせいでもあろう、今年の梅は、大祭の頃早くも咲きかけていた。その花を慕って集るようには、

それから毎日のように庭に鶯を聞いた。又座敷に座つてながめていると、声も立てずに花から花へと渡り歩いては、花弁を蹴落している可愛い姿も時々眼にふれた。ほんとに楽しそうに、しかし声もたてずに花々に口づけしている姿、如何にも初恋同士の戯れ、しごび合いのように思われて、こちらまで声を殺し、身動きも控えて、固唾をのんだ。

梅に鶯。

それは若樹の花を思い起させる言葉である。

梅にも鶯。それは古老木の梅に戯れる鶯を懐しむ言葉である。

「今頃は御用場の前の梅に、よく、数羽の鶯が来ています」と青年が教えてくれたのも、つい最近であった。

今年梅と鶯に春を迎えた感じの深い年である。

昭和二十四・三・五、山口・山水園 (本文より抜粋・現代仮名遣いに改変)

ほうけんこぎねまる
『宝剣小狐丸』

ある木枯らしの吹く冬の夜、布留の里の女が寂しい菅田（すがた）の森にさしかかった。と、後ろから呼び止める声がある。ギョツとして立ち止まると、声の主はオスのキツネだった。

「私の子どもがおなかをすかして泣いています。母ギツネに死なれた子どもはふびんです。どうか乳を恵んでやってください」

いとも哀れな声を出して訴える。女はほつとして、かわいそうなギツネに、毎夜この時刻に来て乳を上げるからといい、毎晩通って乳を与えた。

大喜びした父キツネは、恩返しをしようと、刀鍛冶の弟



『てんりの昔ばなし』より

子に化け、一振りの刀を作った。立派な刀をお礼にと女に贈った。たいそう喜んだ女は刀を「小狐丸」と名付け、守り刀として大切にしていた。

その頃、菅田の森の池に、恋に破れた女の化身の大蛇が、毎夜大暴れしては花嫁を連れ去り、田畑を荒らして人々を苦しめていた。その話を聞いた女は、キツネの助けを借りて大蛇を退治しようと池に向かった。「小狐丸」をふるって大蛇に切りつけ、暴れ狂う大蛇はのたうちまわって抵抗したが、「小狐丸」にのどを突かれ、真っ赤な血で池

を染めながら退治された。村人も大喜びで、小狐丸を手にした女にみんなで礼をいい、喜び合った。

大蛇を退治して帰る途中、三島の庄屋敷村の東、姥が堰（うばがい）で刀の血のりを清めたといわれている。女は刀を石上神宮に献上した。

江戸時代に古墳の盗掘が流行したころ、この「小狐丸」を持つ

ていくと墓のたたりがないといわれ、一時盗賊の手に入ったが、その後ある殿様の手に渡った。あまりにすばらしい刀に、由緒をたずね、もとの石上神宮に戻した。何度も盗難にあった刀だが、今はもとの神宝として宝蔵に納められている。刀を抜くと子ギツネの走る姿が現われるという。

（『てんりの昔ばなし』に記載を要約）
※「菅田」は近鉄二階堂駅と平端駅の間あたりの北方。菅田神社が大蛇の話の舞台。「姥が堰」は、現在の教会本部の東礼拝場前庭の下あたりにあったようである。

第10回「陽気」読者講演会

頭の痛い話



ながせき頭痛クリニック院長
永関慶重

平成20年2月25日(月)午後2時~3時
天理大学ふるさと会館大ホール
(天理図書館西側) 開場は30分前です

TEL 0743-62-4503 FAX 0743-63-8077 養徳社「講演会」係

好評発売中!!
植田與志夫氏 待望の著書



昨年11月26日に発刊した『さあ、これからやー信心は意気と熱ー』が、好評をいただいています。

何度読んでも胸打ち、血が湧く話に、読者の方から「おたすけに向かうフェリーの途中で読んで感激し、思わずお礼の電話をかけました」題名がいい。私の背中をそっと押してくれたなどの声が届いています。

奇しくも養徳社発行千冊目の本。自信を持ってお薦めする、一人でも多くの人に読んでいただきたい本です。

四六判上製・二七二頁
定価 一、三六五円(税込)

講演会CDも好評発売中!

※ご購入は、おちばの各書店でお求めくださるか、直接当社へご注文ください。

(☎0743・62・4503)

養徳社 よもやま話

★天理本通りの神具店さんを覗いてください。赤地に白字で「陽気」と書かれたかわいいのぼりが目に入るはず。会議を重ねて完成した手作り品。一人でも多くの人に「陽気」を知ってもらいたい! 社員一同、企画を練っています。

★昨年、仕事納めの日に「胃腸風邪」に罹った。布団にうずくまりつつ夕刻、ああ今ごろは、納めの会でみんな楽しく、思っているよSさんからメール。「酒がうまいわ」と来た。はいはい、前年は入院中だった貴殿に代わって今年は僕が寝てあげているのだ、と独りごつ。

広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか? 掲載料金は、広告の大きさによって異なります。料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで
☎0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用いただけますよう、お願い申し上げます。

養徳社